

經濟學史の方法と問題

高木 暢哉 編著

経済学史の方法と問題

高木 暢哉編著



ミネルヴァ書房

《編者紹介》

高 木 暢 哉 (たかぎのぶや)

明治43年 広島市に生まれる
昭和11年 九州大学法文学部卒業

九州大学経済学部教授を経て

現 在 福岡女子大学学長、九州大学名誉教授、経済学博士

著 書 『利子学説史』(日本評論社、昭和17年)

『再生産と信用』(有斐閣、昭和32年)

『信用制度と信用学説』(日本評論社、昭和34年)

『現代不換通貨の価値』(未来社、昭和46年) その他

共 著 『貨幣・金融の基礎理論』(ミネルヴァ書房、昭和43年)

訳 書 サン・シモン『産業者の教理問答』(世界古典文庫、昭和23年)

経済学史の方法と問題

1978年 4月25日 初版第1刷印刷

検印省略

1978年 5月15日 初版第1刷発行

定価はケースに
表示しています

編 者 高 木 暢 哉

発 行 者 杉 田 信 夫

印 刷 者 林 健 次

発行所 株式会社 ミネルヴァ書房

607 京都市山科区日ノ岡堤谷町 1

電 話 (075) 581-5191(代表)

振 替 口 座・京 都 8076 番

©高木暢哉, 1978

太平洋・新生製本

3033-41073-8028

Printed in Japan

は し が き

私の属する経済学史学会西南部会は、『ミネルヴァ書房の手を煩わして、『近代経済学史研究』（一九七二年）と『経済学史研究』（一九七三年）との二著をすでに世に送り出している。いずれも、大学についてのテキストまたは参考書としての利用のことも考慮に入れて、一面では特殊に突っこんだ論述もないではないが、概して年代を追っての系統的で概説的な通史の形をとることになった。そこでこんどは逆に、特殊的・個別的・問題的な経済学史研究の書物があってもよいのではないか、ということが考えられてくる。人物や問題などを中心に、通史的・概説的な論述に煩わされず、特殊個別的に、さまざまの角度から、さまざまに問題を追い求め、相当に突っこんで、思いのままに論じてみる。そういった、いつてみれば経済学史論とでもいえそうなものも、あつてよいのではないかと考えられた。

実をいえば、私個人として、そういった課題を、いつかは自分自身にとっての仕事としてやってみたいものとかねて思わないわけでもなかったのである。経済学史とはなにか、経済学史を学ぶとは、どういうことか。そもそも経済学はどういう風にして、どういうものとして生れてきたのか。そしてその後どういう発展の仕方をする事になったか。経済学は、さまざまの論客により、さまざまの仕方で、さまざまに問題が取り上げられ、論じられ、主張もされて、今日に至っている。そういうことを学び、かみしめ、味い、評価してみたりしながら、私自身がこれまで長く馴れ親んできたためにかえっていつしか感受性が鈍磨するようになってきた経済学というものについて、あらためて学び直し、取り組み直してみたい、そういうことをかねてから思っていたのであった。実のところそういう考えから、少しくは書きかけ始めていたのであつて、その書き出しの部分が本書の第一篇におかれ

ることになった。しかし現在私がおかれている状況からみると、思うは易く、行なうは難しである。まずまずすぐにはうまく実現しそうにもないことが分かってきた。

そう思っているときに、年来私の近くにあって研究をともししてきた友人たちが、私にはちょっと果せそうにもみえないこの課題を引き取り、このような書物の形で取り上げてもらえることになった。結果的には、その方がむしろよいことであった。というのも、それぞれの執筆者が、それぞれ独自に、個性的に、それぞれが手掛けてきた研究上の成果を持ち寄って作り上げられることになるからである。それぞれの執筆者が関心をもつ人物や問題を取り上げ、それぞれ自由に論じてもらえるのだから内容は多彩になり、密度も高まる。書名の方は、『経済学史の方法と問題』ということにした。しかし、方法もまた問題の一つとして問題とされているものと、理解されて欲しい。やはり、そういった問題的な『経済学史論』としての意味のものであると本書が受けとられることを、私としては希望している。

このような趣旨で書かれた本書であるため、当然に、通史の意味での均衡や網羅性や系統性を欠くことになった。そのことは初めから了知している。しかしそれでも心残りがはないのではない。本書において取り上げておきたかった人物や論題には、もとより他にも多くのものがあるからだ。とくに、ドイツ歴史学派、新古典学派、アメリカ制度学派などから、それぞれ一人くらいは選び出して論じておきたいものであった。しかし本書の分量だけでも、はや四〇〇ページを優に越える。そうでなくとも、出版を引き受けて下さったミネルヴァ書房には迷惑のかけとおしであった。またの機会にと希望を托し、そこで書き起こすべきであろう。

『近代経済学史研究』、『経済学史研究』以来、ミネルヴァ書房の杉田信夫社長には三度目のお世話になる。同じく高橋邦太郎氏からは引きつづき編集の面倒をみてもらってきた。感謝に堪えない。編者の不都合から心にもない手数をかけてしまった。原稿が出そろいながら公刊がこの時期になったことについては、私自身に責任がある。お礼とともに、心からお詫びを申したい。同様のことは、他の執筆者に対してでもある。なお本書第三篇第一章は、

亡き広渡貞喜氏の手になるすでに公表すみの論稿であるが、これを見たいという希望がなお学界に絶えぬようなので、編集上の最小限の手を加えて、本書に収めることにしたのである。

昭和五三年三月一日

編者 高木 暢 哉

目次

はしがき

第一編 経済学史の意義と方法

第一章 経済学史の本質と意義

第一節 経済学的思考と経済学史的思考……………三

第二節 経済学的知識……………五

第三節 経済思想と経済思想史……………二

第四節 経済学史研究の意義……………一六

第二章 経済学史の方法

第一節 三つの類型……………二四

第二節 第一の型について……………二六

第三節 第二の型について……………三〇

第三章 経済学史研究における理論と歴史

第一節 第三の型について……………四

第二節 現時点における第三の型……………五〇

第三節 その評価と意義……………四

第四節	学史研究における理論と歴史——結びにかえて	三
-----	-----------------------	---

第二編 経済学の形成過程

第一章 トマス・マンの『東インド貿易論』

第一節	東インド貿易の特徴と東インド会社	五
第二節	『東インド貿易論』の理論的性格	五

第二章 ジョン・スミス経済理論の構造

第一節	はしがき——問題把握の視点	六
第二節	ジョン・スミスの経済理論	七
第三節	むすび	二〇

第三章 ジェイムズ・ステュアートにおける「商業社会」と信用

第一節	問題の所在	二四
第二節	社会的な貨幣流通の展開と「流通の銀行」	二六
第三節	G—W…P…W'—G'視点と「富のバランスの振動」	二九
第四節	金貨幣と土地 ——「約束手形」の流通根拠——	二四
第五節	対外差額の逆調下の「流通の銀行」	二六
第六節	支払準備金の枯渇下の「流通の銀行」	二九
第七節	むすび	三三

第四章 ケネーにおける所得分配と楽観主義

第一節 はしがき——分配所得の形成……………	一三五
第二節 『経済表』以前の諸論稿と「農家利潤」……………	一三八
第三節 『経済表』と「農家利潤」……………	一四〇
第四節 「利潤」範疇の存在の規定……………	一四二
第五節 賃金の実体と変動……………	一四九
第六節 地代、租税、商工業者利得、金利……………	一五三
第七節 むすび——所得分配における楽観主義……………	一五八

第三編 古典派経済学の成立と展開

第一章 アダム・スミス政治経済学体系と国家の問題

第一節 はじめに……………	一六〇
第二節 国家についての否定と肯定……………	一六二
第三節 前提条件としての国家……………	一六四
第四節 蓄積促進に必要な外的条件……………	一六七
第五節 経済発展の自然的コースと近代資本主義国家の成立……………	一七二
第六節 国家の役割、政治経済学の体系……………	一七七
第七節 スミス財政論の基礎視角……………	一八三

第二章 アダム・スミス政治経済学体系についての一考察

——『国富論』後半体系について

第一節 はじめに……………	一八六
---------------	-----

第二節	体系構成上の特徴	一八九
第三節	富裕と安全の見地	一九六
第四節	正義との関連でみた安全の見地——結びにかえて	二〇四
第三章	ジェイムズ・ミルと古典派自由貿易論	
第一節	問題の提起	二〇七
第二節	ミル対スペンズの貿易市場論争と資本蓄積論	二三三
第三節	『商業擁護論』と古典派自由貿易学説	二三七
第四節	古典派経済学におけるジェイムズ・ミルの地位	二三九
第四章	リカアドウの資本蓄積論	
第一節	はじめに	二四四
第二節	初期の資本蓄積論	二四六
第三節	資本蓄積論の基本構造 ——発展的社會の人口法則——	二五〇
第四節	資本蓄積と利潤 ——蓄積誘因論——	二五五
第五節	むすび	二六九
第五章	ジョン・ステュアート・ミルの資本蓄積論	
第一節	基本の視角	二七三
第二節	静態論における資本蓄積論	二七七

第三節	動態論における資本蓄積論	二六
第四節	ミル経済学と資本蓄積論	二五

第四編 マルクスの経済学体系

第一章 経済学批判体系の生成過程

一 国民経済学批判の視座

第一節	はじめに	二六
第二節	感性的欲求と類的存在	二六
第三節	疎外された——外化された労働の概念	三〇
第四節	経済学的諸範疇の展開	三〇
第五節	むすび	三三

二 『経済学批判要綱』における剰余価値論の展開と歴史認識の深化

第一節	はじめに	三五
第二節	近代的生产への接近視角	三六
第三節	「時間の経済」と剰余労働	三九
第四節	「近代の経済学」と剰余価値概念の成立	三四
第五節	剰余価値論の展開と歴史認識の深化	三七

第二章 『資本論』体系の諸問題

一 『資本論』の基本構造

——一つの問題提起——

第一節	二つの構造観……………	三三
第二節	「相対的剰余価値」の独自性……………	三四
第三節	『資本論』の相対化と対象化……………	三六
二	資本蓄積論について……………	
第一節	はじめに……………	三五
第二節	市場機構と制御装置……………	三九
第三節	資本蓄積と市場機構……………	四一
第四節	おわりに……………	四二

第五編 マルクス経済学の展開と現代

第一章	ヒルファディング『金融資本論』の理論的特質……………	
第一節	評価の視角……………	四〇
第二節	独占化の過程の分析……………	四四
第三節	過渡期における理論……………	四二
第二章	レーニン『帝国主義論』における方法上の特質……………	
第一節	はじめに……………	四六
第二節	レーニンにおける段階認識……………	四九
第三節	いわゆる超帝国主義論との対比……………	五〇
第四節	ヒルファディング『金融資本論』との比較……………	五〇
第五節	むすび……………	四四

第一編

経済学史の意義と方法

経済学史をわれわれは学ぶという。しかし考えてみると、この学ぶということが、すでに問題をはらむ。学ぶという経済学史とは、そもそもなんであるか。どんなものか。そして、ともかくもなかであるとして、経済学史をわれわれは、なんのために学ぶのか。われわれとなんのかかわりもなしに学ぶということは、ないであろう。ところでなんのためにか学ぶとして、どのように学べばよいのか。それは方法の問題である。しかし、どのようにか学ぼうとするには、その学ぼうとするものの性質や構造が分かっているといないと、見当はずれの研究になる。それが判明して、研究はおのずから肝どころに触れる。しかしこれもまた考えてみると、それができるためには、まず経済学史とはなにか、ということが分かっているなければならない。すなわち初めの問いに立ち帰ってくることになる。なんのために学ぶかという問いとも、それは無関係ではあるまい。このようにして経済学史の本質とか意義とかをめぐり、問われてこざるをえないのである。

第一章 経済学史の本質と意義

経済学史とはなにか、という問いは、一見自明なことのようと思われる。経済学についての歴史であると、ひとまず答えることができるであろう。けれども実は、同じ言葉を繰り返えしたただけのことではない。答えにみえて、答えになっていない。経済学とはなにかということを、聞きただしてみなければならぬ。経済学の歴史という。その歴史ということにも、なにか格別な意味がありそうにみえる。しかもそういう「経済学の歴史」を学ぶと

いうことは、そもそもいったい、どういうことなのか。学ぶということは、学的思考のことであるが、それはもと、どのような学的思考に属するのか。経済学史は、他の種類の歴史とは区別されての経済学の歴史であった。したがってそれに特有な内容を持ち、特有な構造をそなえているはずである。そういう特有な歴史的・性格・構造をもつ経済学史を学ぶとあってみれば、その場合の経済学史的思考には、これまた特有な性格規定が備わっていないということはない。経済学史的思考とはどんなものであるかという問いに、つきあたる。

けれども、経済学史的思考もまた本来の経済学的思考から離れてありうるものではないであろう。その一要素、一側面を形づくる。ということになって、こんどは経済学的思考とはなんであるかということが、考察されるのでなければならぬ。ここにまで問いが拡がってこよう。経済学的思考の所産が経済学的知識である。経済学的知識の歴史が経済学史であった。経済学史についての経済学的思考から経済学史の知識が生まれる。経済学史と経済学史的思考、経済学的知識と経済学的思考などということにまで、問いは拡がってくるのである。

第一節 経済学的思考と経済学史的思考

経済学自身が歴史的に生じたものであった。それは歴史的に発展し発達し、そうして経済学史というものが、いまここにある。しかし経済学は、経済学的思考によるものであった。経済学的思考が歴史的に生じ、今日にまでおよび、現に今日において機能しているということにはかならず。そうして経済学史ということにもなっている。こうして経済学史は、なによりもまず経済学的思考の歴史であるということができよう。

そこでもしも、経済学史を経済学の単に時間的に並べられた歴史的系列としてのみみるならば、経済学史が本来もつところの思考の歴史的運動としての面が不当にも閑却されてしまうことになるであろう。そういう見方は、経済学史を経済学的思考そのものより引き離し、対象化し、客観化し、単に過去のものとしてののみみてしまい、いっ

てみれば物理的時間の線上に配置された觀念の系列にすぎぬものとして捉えてしまっているからである。眞実のところは、経済学的思考が生み出す経済理論や思想の歴史的運動にほかならない。経済学的思考とは、もともと働きではないか。それは本性上能作ということだ。しかも歴史的に行なわれる働きである。そうして理論や思想が生み出される仕方がまた歴史的になる。生み出された理論や思想を足場とし、契機として、つぎつぎと新しいそれらが歴史のうちに生み出されてゆく。経済学的知識を生み出すものは、まさに経済学的思考であり、そういう経済学的思考の歴史的運動のあとに残された足跡として、軌跡として、経済学的知識の時間における系列が見出されうる。しかしそういう足跡や軌跡を、経済学史そのものとみることはできない。そういうものを後に残しつつ運動してやまないものとして、経済学的思考の歴史的運動がある。こういう運動こそが本来のものであり、経済学史の眞実といえよう。経済学とは、経済学的思考の所産であつた。それは歴史的に生み出され、發展し、運動し、とりもなおさずそれが経済学的思考の歴史的な運動であり、それが経済学史であるということ以外ではあるまい。経済学は、経済学史という歴史的運動の形をとつて現実的には働きをつづけ、つまりは経済学史とは、歴史的に運動し發展してやまない経済学自身のことであるということになつてこよう。

そういう歴史的な経済学的思考の運動を省みて検討し、吟味しようとする経済学的思考が、経済学史的思考ということになつてくるであらう。経済学史的思考とは、経済学的思考の歴史的運動についての経済学的思考自身が行なう自省・反省・吟味以外ではないようだ。

ともかくもわたくしとしては、機能・運動・能作・働き・過程としての経済学的思考や経済学史的思考などに注意を加えてみたいと思うのである。運動し機能し働くものでなければ、歴史的であることはできない。作られた経済学、書き上げられた経済学史ではなくて、それを作る経済学的思考、それを書き上げる経済学史的思考こそが、眞実である。経済学的思考の歴史的運動が経済学史であり、そういう歴史的運動を自省する経済学的思考が、経済学史的思考というまた歴史的な運動・機能・過程にほかならない。このことについては、後にいたつて、ふたたび

詳しく論じることになるであろう。

第二節 経済学的知識

経済学的思考の成果が経済学的知識であった。そういう経済学的知識の時間的歴史的系列として、経済学史は現われて出る。そこで経済学史とはなにかということについて答えるためには、この経済学的知識ということであらかじめ頭に入れておく必要がある。もとより、それを生み出す経済学的思考というものが、ここでも問題とされねばならぬことは、いうまでもないが。経済学的思考は、経済学的知識を、どのような仕方、どのようなものとして作り出すのか、経済学的知識のがわからいえば、どのようにしてそれは作り出されるのか。

経済学的知識の形成を論題とし主題としている場合ではないので、ここでの考察は必要と思われるかぎりでの簡略なものとしなければならぬことは、いたしかたない。

経済の事実が、人間の思考を経て、その意識の上に秩序ある観念の合理的体系の形をとって再現されるときに、経済学的知識は成り立つ。経済学的知識は、こうしてひとまず経済的事実についての秩序ある観念上の再現であるということができよう。もちろんその再現にあたり、思考する主体のがわにあっての一定の関心などのごとき選択する働きが介入することを、看過していつているわけではないのであるが。どのような経済的事実が思考の対象に選ばれ、またそれのどのような側面が、どのような角度から選ばれて思考されるかについては、思考する主体のがわにおいての価値判断のごときがかわりをもつ。特定の関心があり、それにそって対象が選ばれ、それにそのような対象接近への視角や態度がとられることになるのである。このようにして思考の対象が構成され、ついで新しい関心や視野が開かれぬかぎりにおいては、思考はこうして設定された構成の枠内に止まって作業を行ない、その外に出ることはない。そういう人間の関心に方向を与えるものがなんであるかは、後に述べることになるであらう。